

葉っぱの力(1)

群馬 直美

葉っぱをテーマに絵を描き始めて、二十三年になります。

絵を描くことは、もの言わぬモノたちとの対話です。自分自身との対話でもあります。描きながらさまざまなことを考え、教わり学び、その結果つかみとったものが、一枚の絵となります。

絵は、言葉を紹介しない世界です。ですが、言葉の

たくさん詰まった世界でもあるのです。

ひとつの画面に一枚の葉っぱを、原寸大でありのまま丹念に描いています。珍しい葉っぱではなくて、日常生活の中で、極々自然に出会った葉っぱです。そんな葉っぱをかたわらに、最低十八時間の

“葉っぱの宇宙旅行”が始まります。

葉っぱの宇宙旅行・ルート案内

“細かな葉脈”の散策のひとつとき

“虫食い穴の冒険”に絶叫

神さま工場特製“色の妙技”を堪能

命の勲章“傷跡の遺跡”訪問

“輪郭のギザギザ山”登山

“産毛の海”を遠泳（オブション・コース）

だいたいこんな感じです。

葉っぱの旅の八年間が、一冊の本となりました。

『木の葉の美術館』（世界文化社刊）です。出版に

先立ち、これまで描いた木の葉の絵一枚一枚に、文

章を書くことになりました。わたしは絵を描く人間

だから、言葉の世界はなあ……恐る恐るペンを執っ

てみれば、なんと果てしない言葉の宇宙が、自分の

中にとぐろを巻いていたことか！ 描き上げた一枚

一枚の葉っぱの絵に、凝縮された言葉がつまってい

ました。

「ひとつのモノをよーく、見る。徹底的に見る。見
たものを手に伝えて、描く」

こんな単純作業の繰り返しですが、はかりしれな
い洞察力や観察眼が、自ずと養われていたことに気
づかされました。

これぞ、“葉っぱの力”。ということ、いろいろ
な対話、コミュニケーションについて見ていきたい
と思います。

木と踊る

さて、わたしは絵を描くだけでなく、踊りも踊っ
ています。

植物公園や人里離れた山奥などで展覧会をするこ
き、決まってやるのが「木と踊る」パフォーマンス

です。

「我ら宇宙船地球号の乗組員」ということで始めました。人も動物も植物も、みんな等しく同等の立場としての「我ら」です。

わたしが木と踊ること、動かないはずの木が、踊っているように見えたり、何か意思を持った存在として、感じて頂けたら大成功なのです。

アトリエの近くに、国営の大きな植物公園があります。そこでもやってみました。

園内放送で集まった人たち二十人くらい。みんな興味津々。わたしはドキドキ。なにしろ即興で踊るのですから、これから先どんなことになるのか、誰も知らないのです。張本人のわたしでさえも……

「みなさん、これから木と踊るパフォーマンスを始めます。最初はみんなと一緒に、ぶらぶら歩きます。踊りたいと思った木と出会ったら、踊り始めま

すので、どうぞ、わたしの後をついてきてくださーい」

と言って歩き始めると、みんなぞろぞろついてきてくれるのでした。

園内のきれいに整備された道ではなく、徐々に、道なき道に分け入ります。みんなも釣られて道なき道に。柔らかな土の感触が、靴底から伝わってきます。生茂った木の下枝を、身をかがめてくぐりぬけると、みんなも身をかがめてくぐりぬけます。くぐりぬけながら、ある人が言います。

「おっ！ こんなところにドングリが！」

それを受けて別の人が、

「あら、こっちにもあるわよお」

そしてまた別の誰かが、

「おっ、しまった！ 踏んでしまったよお」

知らない人たちのコミュニケーションの輪が、少しずつ出来上がっていきます。ちよつとした冒険旅

行です。わたしはそのナビゲーター。みんなの心とからだが踊り始めたぞ！と嬉しくなるわたし。

突然、ピタッと立ち止まります。踊りたい木と出会ったのです。まるで打ち合わせしたかのように、みんなもピタッと止まります。一本の木を前にして、完璧に出来上がったコミュニケーションの輪。

さあ、ここからは、わたしと木との対話の時間です。みんなに見られているという緊張感で、普段、味わうことのできない木の側面が見えてくるのです。

これまで踊った木の中で一番印象深かったのは、ハナミズキ。優しいと感じたのは、ハクモクレン。泣かされたのは、アカマツ林。

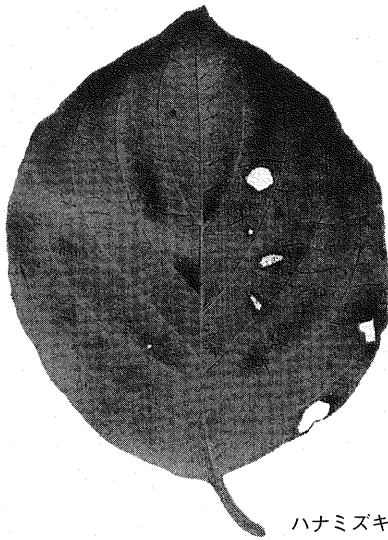
ハナミズキ

ハナミズキは、北アメリカ出身の木です。その木

が、なぜ日本にいるのか？

一九二二年、東京市長だった尾崎行雄氏が、サクラの苗木をワシントンに贈りました。お返しとしてやって来たのが、ハナミズキ。植物親善大使ですね。

わたしの町のいつも通る道沿いの街路樹も、この木。葉っぱの色づき加減が独特で面白く、何枚も描いていました。だから、とても馴染み深い木だった



ハナミズキ

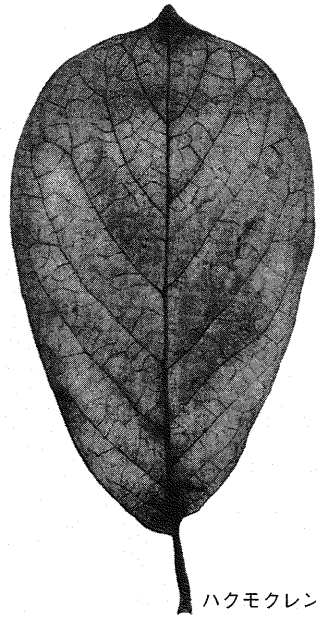
のです。いざ踊ってみてビックリ！ 樹肌はゴツゴツ、画びょうをまといっているんじゃないかと思うくらい痛いukseenに、小枝にちよつと触れただけで、悲しいくらいポキポキと折れてしまうのです。

陽炎の儂さと棘の鋭さをあわせ持った、切ない木でした。

ハクモクレン

「木と踊る」パフォーマンスを始めて、一番最初に踊ったのが、この木。

生長すれば高さ二十メートルにもなる高木ですが、わたしが踊ったのは、三メートル足らずの可愛らしい木。西日を浴びて、まだ落ちきらない葉が、大判小判のように黄金色に輝いています。最初は遠巻きに……どうも馴染めません。思いきって小走りに根元まで一気に詰め寄ると、やっと、たおやかなダンスの時間が流れ出しました。遠くで遊ぶ子どもたち



ハクモクレン

の聲が、幸せな音楽のように聞こえてきます。しなやかな枝。なんだか高貴な生まれの方と踊っている気分。

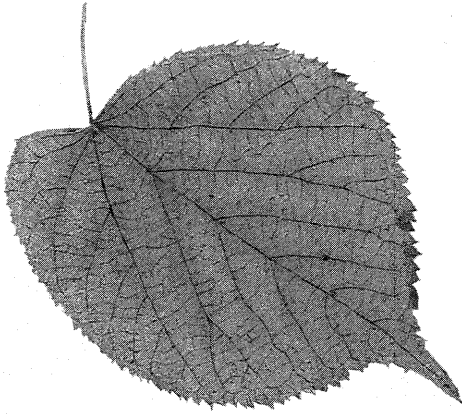
それもそのはず。中国出身のハクモクレンは、故郷中国で、高貴な花木として古くから愛でられ、寺院や宮城に多く植えられていたのです。

じつにしなやかな優美さを持った、優しい木でした。

アカマツ林

小淵沢在住の画家さん、Mご夫妻の展示スペースで、展覧会をしたときのこと。

踊りの格好に着替えて出てくると、遙々駆けつけてくださった友人知人たちで、会場内はごった返していました。みんなハーブティーを飲んだり、手作りケーキを食べたり、非常に和やかなムードです。



セイヨウシナノキ

あまりの和やかさに、止せばいいのに、ひとりひとりに自己紹介なんかさせちゃったりして……空気はますます和やかに。もはやこれから踊りを見る場の雰囲気ではなくなってしまうました。このままここで、お茶してたい感じ……それでも無理してみなを、アカマツ林に連れ出しました。

スラーつと天高く伸びたアカマツの幹、幹、幹。仰げば、林立するアカマツの枝が、入り組んだ鉄格子のように空をふさいでいます。アカマツ牢に幽閉された、蟻の心地です。

悪戦苦闘の三十分の末、踊りの最後を決めようとしたとき、脇道をバカッバカッと馬が駆け抜けて、事も有ろうにわたしが踊っているすぐ横で、乗っていた子どもが落馬。見ていた人たちの意識を全て持っていかれて終わりでした。その後、会場に戻り、さらに和やかな雰囲気で、何事もなかったかのように、人と人との暖かなコミュニケーションの輪

が広がりました。

アカマツ林には本当に泣かされたけれど、極彩色の映画の一齣のように心に残っています。失敗してもやらないより、やったほうがいい。(涙の教訓)

さて、「木と踊る」パフォーマンスを見た人たちの反応は？といえ、みんな口をそろえて

「こういうことは、どんどんやったほうがいいですよ」

と言うのには驚かされました。ある年配の男性は、眼鏡の奥の目を潤ませながら、にこやかにそう言うてくださいました。お顔を見るとその方も、ひと踊りされたような清々しさ。

木に登ったり、体当たりしたり、逆さになったり、転げたり、駆けずり回ったりと、常軌を逸したわたしの踊りに、です。こんなことしたら、みんなに石でも投げつけられるんじゃないかと思っていた

ので、その反応にかなり面食らいました。

コミュニケーションとは、自分自身を深く掘り下げる作業と同時に、外に外に、発信し続ける作業の循環で出来ているのだな、とこのとき実感しました。

出来る限り常識に囚われることなく、「葉っぱの力」のコミュニケーションを、この誌面で探究していきたいと考えています。

第一回目の「葉っぱの力」は、あなたとうまくコミュニケーション出来たでしょうか？

(葉画家)

☆イラストは三点とも筆者による。紙／テンペラ。

群馬直美『木の葉の美術館』世界文化社、一九九八より転載。